

●まつえみき

体育教師を目指し、東京学芸大学に入学。在学中、交通事故による怪我により、車いすの生活が始まる。車いすでのスポーツを始め、持ち前の運動神経と努力で、わずかな競技圧にもかかわらず、長野パラリンピックにアイススケート選手として出場。大会では金メダルを獲得。現在、東京学芸大学を卒業し、障害者スポーツに関する本格的な勉強のためアメリカに留学中。



パラリンピックが変えたもの

1997年に開かれた長野パラリンピックは、「バリアフリー」という言葉について新しいイメージを付け加えたのではないだろうか。これまで障害者の方々に対して、「気の毒に…」とか、「可哀想に…」と、見て見ぬふりをしてきた多くの人たちの中にも、新しい見方が芽生えたのではないだろうか。私は、幸いにも長野でパラリンピックを観戦する機会を得て、国内外の選手たちのプレー、そして選手村での様子、彼らの熱いプレーを応援するため会場に詰めかけた。小中学生の観戦ぶりからそれを感じた。

その選手たちの中でも、アイススケートは強かつた。失礼な言い方ではあるが、前評

は、時代のキーワードとして取り上げられるなどの取り組みは始まっていた。当然、長野パラリンピックも、そのような取り組みのきっかけとして大きな効果もあった。しかし、段差が無くなったり、エレベーターが付いたり、点字ブロックが整備されたりするだけではない、何か心が振り動かされるものがあった。それは、「明るさ」「カッコ良さ」「あたりまえさ」とでも言える、心のバリアフリーへの気づきだった。

スケートで大活躍した松江美季さんの印象

は、その選手たちの中でも、アイススケート

こころのバリアフリーは、あたりまえの生き方

長野パラリンピックは、「障害者」の新しいイメージを引き出した。

それは、「明るさ」「カッコ良さ」「あたりまえさ」だろう。

バリアフリーという言葉が叫ばれて久しい。

街の中から段差が消え、エレベーターが付くことは良いことだ。

しかし、モノまかせだけでは、真のバリアフリー実現は望めない。

頭で理解するだけでもない。私たちの心の内に、

あたりまえにバリアフリーができるってこそ真に豊かになった証だろう。

長野パラリンピックメダリスト

松江 美季

聞き手・構成／中間真一

判ではそれほど注目されておらず、当時はまだ大学生だった彼女である。そんな、勝つてあたりまえの選手ではなく、ペテランでもないフレッシュな彼女であつたからこそ、観ている私たちに訴えかけてくるものが新鮮であり、印象深かったのではないかと思う。てら子屋フォーラムの第一回は、その松江さんを迎えての本当に意味深いスタートであった。

松江さんは、大学時代の交通事故により、車いすの生活が始まった。そのことを、彼女は次のように語っている。

まず、私がなぜケガをしたのか、ということからお話をしたいと思います。

いまから5年前、私が大学1年のときのことです。当時、大学まで自転車で

通っていたのですが、その途中で交通事故に遭いました。青信号になるのを確認してから横断歩道を渡つていたのですが、わき見運転をしたダンプカーが突っ込んで、私は横断歩道から20、30m跳ばされたそうです。事故の瞬間から10日間ぐらい意識不明の重体だつたので、事故のことは全然覚えていません。飛ばされた私の上に急ブレーキをかけたダンプカーがのつかつた格好になつたのですが、どうにか潰されずに済んだということでした。で

松江さんは、大学時代の交通事故により、車いすの生活が始まった。そのことを、彼女は次のように語っている。

まず、私がなぜケガをしたのか、とい

胸、腰の3カ所の脊髄を折ったことで、これが下半身不随という障害を引き起こす原因になりました。

私は小さい時から体を動かすのが好きで、スーツよりもジャージの似合う職場に行きたかったので、中学校の体育の先生になるために勉強していました。でも、突然障害を持つて生活することになつて、これから先、スポーツとは

車いすを見つめる視線

そんな彼女が、スポーツまつしぐらだつた頃、障害者を見ていた自分を次のように話している。

はずかしい話ですが、ケガをするまならないのかと、しばらく落ち込みました。

スポーツをやるからには、一流となることを狙つて柔道の稽古に励み、将来は体育の先生を目指し、実際に目標達成に一歩一小歩近づいていた、運動神経抜群の彼女に対するイメージでした。

では障害を持った人のことを理解しようとあまり思つたことがなくて、悲劇のヒロイン、かわいそで、みんなに同情されて、1人じや生きていけない人というのが私の持つていた障害者に対するイメージでした。



階段を降りようとしている車いすの人がいたら、体の正面は階段の上側を向くようにして介助しよう。



マラソン競技用の車いす。より速く、より軽く、ムダを削いたフォルムは美しい。



ほんの少しの段差や傾斜でも、車いすではかなりたいへんなことになる。

多分これは、普通の感覚だろう。そしてケガをして、自ら、まさかの車いす生活になつてみて、そのイメージは少し変わったそうだ。

でも周りの人は私のことを「かわいい

「そんな子」と見るだろうと思つたし、実際に外に出てみると、「あら、まだお若いのに」とか「どうしちやつたのかしら」という言葉だけが妙に聞こえてくるんです。自分では、ケガをする前と後で、性格が変わつたとは思つていないので、人から「自分の足で歩けないのに、なんでそんなに笑つていられるの？」なんでそんなに明るくしていらっしゃるの？」と言われて、私はただ足が悪いくらい車いすに乗つてゐるだけなのに、なんで今までの自分も変えなきやい



長野パラリンピック直前の合宿にて、監督とともに。

けないんだろう、障害を持つつてそういうことなのかなあ、暗くしていた方が障害者っぽくつていののかな、そんなことを考えた時期もありました。そんな彼女の戸惑いに、追い打ちをかけようなエピソードもあつたという。

スーパーに大好きなチョコレートを買いに行つた時のことです。すごい勢いで突進してきた幼稚園ぐらいのお子さんが、私の車いすにぶつかりました。たんこぶをつくるくらいの衝撃だつたようで、すごく泣いたんです。私はもちろん「ごめんね、大丈夫だつた」と謝りました。でも向こうがぶつかってきたのだから「ごめんなさい」ぐらい言つてくれると思つていたのですが、その子のお母さんは「ほら、なにしているの。

の？ なんでそんなに明るくしていらっしゃるの？」と言つて、私はただ足が悪く車いすに乗つてゐるだけなのに、なんで今までの自分も変えなきやい

スポーツとの再会

そんな中で、彼女はあきらめていたスポーツとの出会いがきっかけとなり、何もこんなに落ち込むことはないんだという気持ちを持つ持てるようになる。

何をやろうかと考えていたところ、アーチャンタパラリンピックも経験された車いすマラソンの監督から、マラソンを勧められました。マラソンなんて2本足で走るだけでも大変なのに、腕だけ42.195kmも走らなきゃいけないなんて、絶対やるもんかと思つたのですが、監督のマジックにはまつてしましました。「車いすマラソンの世界記録、知つているか？」と聞かれ、オリンピック選手が男性でも2時間ちょっとだから、倍ぐらいかかるかな、でも選手なのだから3時間ぐらいかなと思つて答へました。実は、当時の世界記録は男性で1時間21分ちょっと。監督に「2本足で走るより40

あんたが悪いことをすると、あんなふうになつちやうんだよ」とはき捨てるよう言いました。「あなたの方がよっぽどひどいわよ」と思つましたが、体に障害を持つつてはなかつたのです。改めて言葉にすると、こんなひどいことがあつてよいのだろうかと思う。しかしその反面、これが現状の姿として普通なのかかもしれない、冷静に思つたりもする。

てしまふのかなと感じました。改めて言葉にすると、こんなひどいことがあつてよいのだろうかと思う。しかしその反面、これが現状の姿として普通なのかかもしれない、冷静に思つたりもする。

そして約1年後、長野パラリンピック選手養成の時期になり、彼女はアイススレッジスケートの世界に飛び込むことになる。当時、私はマラソンを始めたばかりの初心者でしたから、監督に声をかけられるような立場ではなかつたのですが、選手に合宿の案内を送るといったことを手伝わせてもらつていました。

ある時、「たまには現場を見にきたらどうだ」と監督に言われ、初めて練習を見学しに行きました。15分ぐらい見ているうちにすごく寒くなつてきて、「見せてください」と言つてしましました。とりあえず、体を動かして暖かくなればいいと思つただけでした。乗つた瞬間は、うまく滑れませんでした。でもしばらくして、少しづつまつすぐに滑れるようになると、今度は早く滑りたいと思うんですね。思いつき力を入れたら、まつすぐ早く滑れる。調子に乗つていたら、次の瞬間、嫌なことが頭をよぎりました。アイススレッジのスケートにはブレーキが付いていないので、ストップを前にうまくついてブレーキにするんです。でも私はどうしていいかわからなかつたので、「助けて

復学がかない、苦労もあったが楽しい時を過ごした大学の卒業式。



パラリンピックに出たい！

「ください」と両手のストックを上げてしまい、アスファルトの上で停止しました。監督は、私がボロボロにしてしまったスケートの刃を見ていきました。スケートの刃を台無しにしてしまったのです。「このままやめるわけにいかないよな」と、監督に言われて「はい、もちろんやります」と思わず答えていました。

大学の授業が終わってから、自分で車を運転して長野まで約3時間。到着後練習して再び夜中に帰ってきて、また翌日学校に行くという生活は、とても体力的につらかったんです。いつやめようかなと思っていました。でも、だんだんとパラリンピックってすごいなあ、できることなら私もその舞台に立つてみたいという気持ちが強くなりました。

ケガをする前は体育の先生になりたいという夢を持っていたのですが、ケガをしてからしばらく、私は夢を持てずにいました。この時から、パラリンピックに出たい、ということが私の夢になりました。夢というのはものすごい力を持っているようで、夢を持つた瞬間から生活にはりが出て、つらいことでも我慢できるし、嫌なことでもやるようになって、すべてがうまく回り

始めたような気がします。そして、記録も少しづつ上がるようになって、どうにか強化選手にしてもらいました。

こうして、松江さんはスランプも乗り越え、記録を上げて、決定的な弱点として指摘された「言い訛病」も克服し、パラリンピック出場権を獲得した。持つて生まれた運動センスが開花したのはもちろんあるが、そのプロセスでの彼女の努力もものすごいものがあったようだ。アイススレッジの練習は、リンクを傷めることもあり、限られた場所で、深夜が早朝の限られた時間、すなわち普通の人たちが使わない環境を利用して行われている。深夜の練習、その後の卒論の執筆、そして充分な睡眠時間も無いままの早朝練習、こんな毎日が続く中でも、彼女が逃げ出さなかつたのは、途切れることのない「夢」を持ち続けていたことが大きかつたはずだ。

夢の舞台に立つて

松江さんが出場したアイススレッジといふ競技は、100mから1500mまでの4種目がある。彼女は、直線だけで勝負できる100mに照準を合わせていたのだが、自己ベストを出しながら金メダルを逃した。それが奮起のきっかけとなつた。

表彰台に上れたからいいか、という

例の言い訛病のまま100mの表彰式に出席したのです。そこで私は変わったと思います。表彰台は1位が真ん中、1

位の選手のために、国旗が揚がつて国歌が流れる。1位になつたのはいつもわいい女性で、「おめでとう」と話をしていたのですが、彼女は表彰台に上がり得意満面で、私に微笑みかけながらノルウェーの国歌を口ずさむんです。それがすごく悔しかつた。

そんな悔しい思いもあり、残り3種目をなんとか頑張ろうという気持ちで次の種目に備えました。というもの、自分で昼寝をしていました。その時、自分が勝利者インタビューに答えている夢を見ました。100mの時は、みんなに見られていて、という思いがブレッシャーになり緊張し、スタート前に嫌なことばかりイメージしていたんです。でもその夢を見た後は、みんなに私の滑りを見てもらわなくちゃ、という気持ちになつていきました。夢のなかで、最高の滑りをイメージで見ていましたからです。

その結果、彼女は自分も、監督もびっくりするタイムを出し、本当に表彰台の真ん中に立つことになつたのである。

障害者スポーツの魅力を伝えたい

オリンピックと違つて、パラリンピックはテレビ中継もあまりない。長野でも、最初は番組の空き時間の穴埋めのような感じ

だつた。それが、世の中の盛り上がりと共に、変わり、結局は総集編スペシャル番組まで放映された。すでに日常の暮らしの中に障害者スポーツが定着している社会の人々と、あまり日常的には馴染みのない日本の人々

の、パラリンピックを応援する姿には、どんな差があつたのだろう。

「あの人たちは、体が不自由でもスポーツをやっているのよ。それだけで大変なことなんだから、結果がどうだつてすごいことなの。応援してあげなく

す。日本人は障害を持っている人たちに対しても、大事にしよう、かばつてあげようという気持ちがすごく強いか

ら、こうなるのかもしれません。しかし、外国でのレースでは、結果が悪ければブーイングもされるし、良い結果が

でたら、国境を超えてみんなが喜んでくれる。スポーツの魅力そのものをみ

んなが満喫して、応援してくれます。でも、残念ながら日本はまだそこまでた

これこそ、心のバリアフリーなんだなと感じた。知らず知らずのうちに、私たちはハンドイキヤップを克服しようとしている姿を対象として見てしまい、純粋にスポーツの魅力を見ていなくてはならないところがある。痛いところをつかれた感じだ。これは、スポーツだけでなく、アートの世界、仕事の場面など、

到着すると、私も会場スタッフも、あたりま

えのように、彼を車いすのままコンサート

を楽しめる席へと誘導した。しかし、彼は

くにとつて、車いすの上が一番居心地の良

いところというわけではないんです。せつ

かく、こんなに素晴らしいコンサートホー

ルのシートがあるので、ぼくもこの座

り心地を味わいたいですよ」と言つた。「そ

あらゆるところで共通した視点だ。このことに関連して、300万部を超えるベストセラー『五体不満足』の著者、乙武洋匡君と

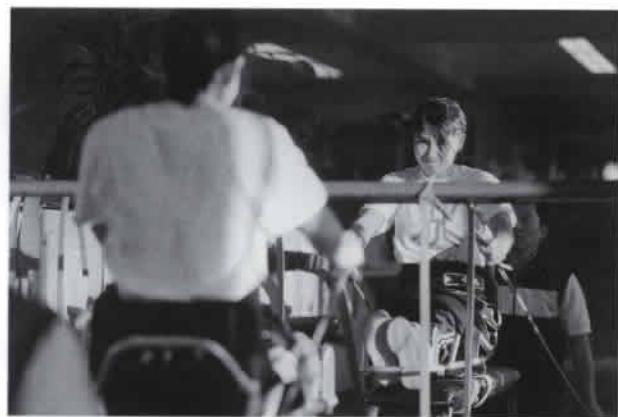
出会った時のことを思い出した。それは、東京国際フォーラムで開催されたコンサート

りやあ、そうだよな自分だつて、1日中オフィスの椅子に座つていたらまらない。目からウロコがボロリと落ちた。

バリアはどこにあるのか

それでは、どうしたら障害を持つ人とそれ以外の人とのかかわりが、うまくとれるようになるのだろう。

コンビニにおにぎりを買いに行つたんです。自分がほしいおにぎりが上の棚にあつて車いすからは届かなくて、取つてほしいと思っていたところに、おじさんが横にやつてきました。私が取りたいのをわかつたのだから取つてくれればいいのに、「あれ、介助の人のないの?」とか、「一人で来ちゃつたの?」と言うんです。車いすの人はいつも誰かと一緒にいて、誰かが支えてくれないと外に出られないと思っていました。それに引き替え、ピアスをして茶髪でとんでもない格好をしているようなお兄さんが、「どのおにぎり?」と、自然に声をかけて取つてくれたりするんです。



欠かすことのないジムでのトレーニング。もはや後戻りのない、真剣な眼差し。



氷上練習中、レースでベストを出すためのフォーカスは定まつた。

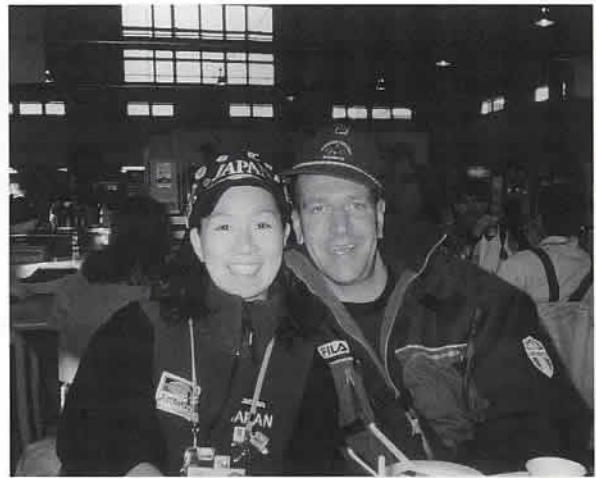
バリアフリーというのは、多くの場合、物理的なことを言うことが多い。特に、行政施策の観点からはそうである。確かに、物理的なバリアフリーの推進は充足にほど遠い現実があり、明らかに解決を急ぐべき社会課題だ。しかし、それと同時に車の両輪の

ことく、1人ひとりの心の中のバリアアフリーも追いついて行かなくては、バリアアフリーや社会の実現にはたどりつかないはずだ。実際に車いすで生活してみると、バリアとは物理的なものではなくて、人の気持ちにある方が大きいと感じます。外国に行くと生活しやすいのは設備が整っているからと思つてゐたのですが、車両にもやはり階段や砂利道など、車いすで移動しにくい状況はたくさんあります。違うのは、障害を持つた人が困ついたら、周りの人々がすぐに手を貸してくれるということ。それが自然なんですね。階段の下で困つていたら、いつの間にか人が集まつてきて上に上げてくれる。

私は北欧、とくにノルウェーでかけることが多いのですが、英語がほとんど通じないからコミュニケーションがとれないような状況です。でも、すんなり階段を上げてくれます。私はノルウェー語で「ありがとうございます」と一言言えば、それですべて終わる。それが新宿の駅だとどうなるか。階段の下で、私は困つたなあ、誰に頼もうかなあ、この人は体格が良さそうだしやさしそうだから、この人に声をかけてみようかなあとと考えることから始まります。そして、その人のところに行つて「すみません。ちょっととあそこの階段を上がりたいんですけど、エレベーターが無いのでお願いします」と頼みます。こんなことが重

彼女のこの言葉には、本当に実感が込められていた。心のバリアフリーなどと言つている私でさえ、頭にガツンと一撃をくらつた感じだ。他人に頭を下げて頼んでばかりの生き方なんて、自分のこととして考へても、ぞつとする。しかし、私たちの心中には、障害者なんだから、そのくらいのことは我慢しなくちや外に出られないんじやないのかとか、気の毒だから手伝つてあげようという気持ちが、まだまだ集喰つてゐるのが実状ではないだろうか。

松江さんの話は、さらにより具体的な信念と自信に満ちた言葉であつた。彼女の途切れることのない夢の力の強さはすごい。彼女のみならず、こうした若い人たちが、いま変わつたある社会を、正しい方向に向かわせていくという実感も得られた。心のバリアフリー。まだまだこれからのこともあるが、若手が兆しをつくり、子どもたちがそれをあたりまえにとらえられれば、将来の豊かさも本物になるものと確信できた。



パラリンピック会期中、外国選手との記念写真。

なると、だんだん人の手を借りるのが煩わしくなつてしまふんです。そういうことが一番バリアに感じます。それを無くすためにも、障害を持つ人たちがもつと外に出ることで、自分たちには何ができる何ができないか、こういうふうに手伝つてもらつたらスムーズにできるということを、自然にみんなに覚えていつてもらえたらしいと思います。そういうかたちで、心の中のバリアを取り去つていくことが、一番のバリアフリーではないでしょうか。

松江さんは、1999年3月末に大学院留学のためにアメリカに旅立つた。中に溶け込ませるべきバリアフリーの価値は大きい。

松江さんは、1999年3月末に大学院留学のためにアメリカに旅立つた。

自分が引退したら、自分が育てた選手にパラリンピックで金メダルをとら

せたいという夢があります。その勉強のために留学します。これは、日本にいてもできることです。しかし、アメリカに身をおいて、広く世界を見たり、感じたりすれば、きっと何か新しいものが見つかるだろうと思うのです。そして、やはり私はスポーツから離れたくありません。スポーツをやつていたから障害を意識しないで過ごすことができた

し、障害を持つたから障害者スポーツができたわけです。障害者のスポーツ人口はまだほんのわずかです。スポーツの楽しさを少しでも多くの障害を持つた子どもたちに伝えたい。意味のあることだと思っています。

とても明るく、とてもさわやかに、そして信念と自信に満ちた言葉であつた。彼女の途切れることのない夢の力の強さはすごい。彼女のみならず、こうした若い人たちが、いま変わつたある社会を、正しい方向に向かわせていくという実感も得られた。心のバリアフリー。まだまだこれからのこともあるが、若手が兆しをつくり、子どもたちがそれをあたりまえにとらえられれば、将来の豊かさも本物になるものと確信できた。